

# Asian Volunteer Report

oct 2010



夏休みにカンボジアの田舎のカンボジア日本友好学園（中高）を訪れ、2週間、日本語と英語のボランティア授業をする活動を始めて7年目になる。最初の年は総勢5名（うち本学学生2名）だった。今年は本学学生を主体とする23名の若者と、現代英語学科のステイブンス氏および文化交流学科の藤田の総勢25名で実施。友好学園滞在が8月29日から9月11日まで。カンボジアの首都プノンペン集合・解散というちょっとハードルの高い設定だが、1年生も多数参加して頼もしいところを見せてくれた。

授業の対象は主に中学1年生三百名ほど。友好学園を卒業した大学生にアシスタントを頼んだので、学生同士の交流も活発だった（宴会も）。

今年は、午前中の授業以外にもいくつか新しい試みを導入した。ひとつは、友好学園創立者のコン・ポーン氏にポルポト時代の経験を語ってもらったこと。もうひとつは、友好学園卒業生の家を訪問してもらったこと。とくに、チョルン家では30名で昼食をこちそうになった（19ページ写真）。ずいぶん負担をかけてしまったと思うが非常に貴重な経験だった。

プノンペンのスラム街と孤児院訪問に加え、今年はバンコクのクロントイ地域で生活向上活動に取り組みドゥアン・プラティープ財団を訪問した。〔藤田〕

アジアボランティア・レポート 2010年10月

ICアジアボランティア・サポート基金 呼びかけ人代表 藤田悟（文化交流学科教員）

茨城キリスト教大学

# 思いのほかクメール語は面白く

文化交流学科 1年 勝山 友里恵

カンボジアに行こうと思った動機は、単純に海外に行ってみたくてということだった。日本とは違う何かを見てみたい、触れてみたい。せっかく文化交流学科に入ったのだから、何か一つくらいはそういうことをやっておかなくてはと考えると、このプログラムに参加することを決めた。

昼の飛行機便で出発したためにカンボジアに着いたのが夜中になってしまった。トゥクトゥクという乗り物でホテルに向かった。そのときに乗った初めてのトゥクトゥクが忘れられない。夜中なので車が少なくて、運転手のおじさんが思いっきりスピードを出して走っていたため、涼しい風が気持ちよくて本当に最高の気分だった。

現地のアシスタントの学生たちと会って、すぐには上手く話すことは出来なかったけれど、相手が積極的に話しかけてくれるのが嬉しくて、私も自分から話そうと日本語と英語を組み合わせながら頑張っていた。単語しか言えない時は、ジェスチャーも入れてなんとかかわかってもらうように必死になって、会話(?)するのがなんだか楽しかった。分かってもらえた時は嬉しいけれど、ちゃんとした会話を英語でしたいと強く願った。

友好学園では子供たちの元気に圧倒されることが多かった。授業中も元気良く質問に答えてくれて、「せんせい！」と呼んで積極的に質問してくれる子が何人もいて、学習意識が本当に強いのだと思い知らされた。自分が生きてきた中でこんなにも堂々と手を挙げて、声を発したことがあったらどうかと少し恥ずかしくなった。

私たちが日本語を教える代わりに、子供たちからクメール語を教わった。思いのほかクメール語は面白く、発音こそ難しかったが、話せると一気に嬉しくなった。覚えてたの言葉を上手く言えたら、みんなOKサインを出してニコッと笑ってくれて。それだけだけど、



そうやって話すことがすごく楽しいことで充実感が得られたと思う。

最初は不安があった。でもそれは何かをやるには拭うことのできないもので、いつも付きまとうものなのだから、仕方が無いことだと思う。けれど、その不安を抱えてまでもカンボジアに行った価値は確実にあるものだった。

本当に行ってよかったと思っている。そして、カンボジアに行ったということ絶対は無駄にしたいと思わない。

心配しながらもお金をだしてくれた親や、お世話になった先生や先輩がたにも、感謝しています。ありがとうございました。

# 豊かさや幸せは心の中にある

文化交流学科 4年 鈴木 麻由

ウルルン滞在記みたいだ！と思い能天気に参加した1年の時から月日は流れ、今回が3回目のプログラム参加です。

前回友好学園を訪れた2008年と比較すると、村の生活は格段に便利になっていました。電気が通ったことによりポンプ式の井戸が電動になり、土の道は砂利で舗装され、往来には以前はほとんど見かけなかった自動車が目立ちました。とはいえ、工業製品が増えた市場のすぐ近くには相変わらず放し飼いの牛がいて、子豚なんかも歩いています。ダイナミックな発展の潮流と村のゆっくりとした時間の流れは、不思議なバランスで混在しているようでした。子供たちがこぼれるような笑顔で出迎えてくれてやっと、リング村に来たんだなあと思いが湧きました。

今回、学園の創始者であるコン・ポー

ン氏にポルポト時代のお話を聞く機会に恵まれました。コンボーン氏は、知識人の大量虐殺が行われたポルポト時代に、幾多の修羅場をくぐりぬけ殺戮荒野から生還した人物です。少年兵として幼い子供たちが残虐な行為をするのを目の当たりにした氏の「子供たちが自分で考え判断して生きられるように」という思いから友好学園はスタートしました。自分で考えて判断ができる、という当たり前のことがどれほど尊いことか。そして、それを可能にする教育の大切さについて改めて考えさせられました。

友好学園で授業をしていると、「Think about others' feelings (自分のことよりもまず、相手のことを考えなさい)」という言葉が思い出されます。2年前に訪れたプノンペンのスラム街の学校の壁に書かれていた言葉です。誰もがその

日の暮らして精いっぱい、という場所にこの言葉はありました。何不自由なく生きているのに自分のことしか考えられない……この言葉を目にしてずいぶん自分の行動を恥じました。カンボジアで出会った子供たちも大学生たちも、誰かのために何かをして笑顔が返ってくると、本当に嬉しそうに笑います。「思いやり」とはありきたりな言葉ですが、彼らといると、豊かさや幸せって心の中にあるのだなあ気付かされます。

授業内容はなるべく、子供たちがこの先日本語の勉強を続けたいくなるような「キッカケ」を与えるようにしようと心がけました。毎日反省点は出てくるものの、それをどう改善するかメンバーみんなで話し合い、知恵を出し合って解決へ導く過程はとても楽しく、また勉強になりました。昨日よりも子供たちに伝わった、昨日はできなかった問題がクリアできた、と実感できる瞬間は全ての疲れが吹っ飛ばすくらいうれしかったです。



子供たちが見せてくれた屈託のない笑顔、満天の星空の下で毎晩際限なく続く仲間との雑談、ふと「お腹いっぱい青春できたなあ」と思うと涙がこぼれました。いつか私たちの授業を受けた子供たちが大学生になって、茨キリの後輩と交流してくれたらいいな。いつか、子供たちとこのプログラムで出会った仲間みんなで集まって語り合ったらいいな。胸を張って子供たちとまた会えるように、自分なりに精いっぱい

生きよう。

大学入学時は別世界だと思っていたカンボジアは、今ではすっかり会いたい人たちのいる場所、ずっと繋がっていたい場所になりました。カンボジアに行くことで知れたこと、感じたこと、考えたこと全てが人生の宝物です。

最後に、この機会を与えてくださった先生、いつも応援してくれる両親、そして仲間たちに心から感謝しています。ありがとうございました。

## カンボジアって素晴らしい

文化交流学科 1年 内田 裕人

私がこのプログラムに参加した理由は発展途上国に興味があったからだ。どうしてもカンボジアに行きたいというわけではなかったが、良いタイミングでこのプログラムの話を聞き、何もしないで夏休みを過ごすなら興味のある

ことをやってみようと思い参加した。私のカンボジアの知識は、アンコールワットがあるところ、暑いところくらいしかなく、正直にいつどこにカンボジアという国があるかも分からなかった。そんな状態でまずタイに到着

した。タイで印象に残っているのがトゥクトゥクというバイクに荷台が付いたようなタクシーだ。トゥクトゥクを初めて見た人だったら、変わった乗り物だなくらいの感想かもしれないが、私の場合は初めて乗った時からその全てが好きになった。まず形がレトロな感じで良いし、装飾品も煌びやかで夜見ると綺麗だし、運転手も気さくな人が多くて良い。そして最も良かったのが音で、タイでも静かな車が増えている中でトゥクトゥクの騒音に近い排気音はとても心地よく、私達が拠点としていたカオサン通りのゴミゴミした雰囲気とその音はとてもよく合っていた。

タイからバスで国境を超えカンボジアに入って、私は発展途上国に来たのだとしみじみ感じた。タイに滞在している間はわりと都心にいたのであまり感じなかったが、カンボジアの田舎道をバスで移動している時など、周りには田んぼと少しの民家と林しかなくて発展途上国という感じがした。

友好学園での生活は経験したことがないことばかりで正直大変だった。ま



ず風呂がないのはわかるけれど外で水を浴びること、次にタイルの床にゴザと蚊帳を張っただけの寝床で腰が痛くなったこと。唯一飯は管理人さんが作ってくれたカンボジア料理がどれもおいしかった。

しかし、そんな辛い生活を忘れさせる程、子供に勉強を教えるのは楽しかつ

た。授業に積極的に参加する子もいれば、後ろの方でつまらなそうにしている子もいたけれど、話してみればみんな素直でいい子だったし、放課後遊びに来てくれた子に来年も来てくれと言われた時はなんだか嬉しくなった。

私達の授業が子供達にとって役にたったかは分からないけれどカンボジ

アの大学生の協力もあり最後までやり通すことができて良かった。

最後に一緒に旅をしてくれた先輩、友好学園で関わった人、カンボジアの学生、先生、子供達、あとカンボジアにありがとう！

## 日本ではできないことばかり

文化交流学科 1年 砂押 嵩人



もの、受刑者の写真が残っていました。その写真の中には拷問を受けるからとても辛い顔をしている人、中には笑顔の人もいたけどなんだか複雑な気持ちになった。

そして、プノンペンから車で2～3時間行ったところのリング村という小さな村の友好学園に着いた。行きの車の中は、大半を寝てしまったのでまわりの景色などが分からなかった。学校に着いてから買い出しで近くの市場まで歩いて行くと、道の両端には、一面水田が広がっていて、遠くまで見渡せるくらいの田舎だと思い、自分が想像していたよりも田舎だったので、少しびっくりした。

最初の授業の日はちゃんと教えられるか、子供たちはちゃんと理解してくれるかなど色々な心配ごとがあった。でも実際にやってみると、子供達は楽しそうに授業を聞いてくれて、自分もだんだんと不安もなくなってとても教えやすかった。授業中も「せんせい、せんせい」と呼ばれ分からない所を聞いてくる。教えてあげると日本語で「ありがとう」と返してくれるので少しは自分達の教えていることが理解されていると思った。

空いている時間や学校が終わったあとは子供たちとじゃれたり子供達にクメール語を教わったり一緒にスポーツをしたり、アラピアという歌と踊りを教えてもらったりしていた。夜になると天気よければ空一面に星が見られるのでみんなで外で寝転がって星を見てなごんだりしていた。

私がカンボジアに行った理由はたくさんある。一つ目はカンボジアという国は旅行などでは滅多に行かなさうなので、このような機会にぜひ行ってみようと思った。二つ目に現地はとても物価が安いと聞いていたのでついいろいろな買い物をしたいという気持ちがあった。三つ目は自分は将来教師になりたいと考えていたのでカンボジアの学校で授業をしてみて、自分は勉強などを人にうまく教えられるのか知りたかったのもあった。四つ目に自分は子供が好きなので、異国の言葉も通じないような子供たちとも接してみたいと思い、このプログラムに参加しようと思った。

カンボジアでは、少し前にポルポト派による大量虐殺が行われた。その時の拷問場とされていたトゥール・スレン収容所という場所に行った。そこには、今も生々しい血の跡や拷問器具、他にも受刑者を閉じ込めておく牢屋のようなものや、拷問の様子を絵にした



最後の授業の日に今までの授業の感想を言っていたら生徒の中で泣いている子もいて自分も少し泣きそうになった。でも生徒たちに自分は来年もまた来ることを言ったら、みんな喜んでくれたので嬉しかった。

自分はこのプログラムに参加してとてもいろいろな体験をしたと思う。そのどれもが日本にはできないようなことばかりで、このプログラムを通して少しでも成長できた気がした。カンボジアという国は行ってみればとても楽しいところで来年だけではなく何回でも行ってみたいと思った。仮に自分が教師になれたら生徒を連れて友好学園に行ってみたいとも思った。



## イメージとはかけ離れた現実

文化交流学科 1年 望月 勇希

私の思っているカンボジアや発展途上国のイメージは貧困や地雷、虐殺などいいものではなかった。その現状をテレビの画面を通して漠然と知っていたが、実際にカンボジアに着いてみると私の持っているイメージとはかけ離れたものだった。

カンボジアの雰囲気は物乞いをしてくる子供もいたが、全部の子供がそうではなく、笑顔で楽しんでいる子供もいて少し平和に感じた。

友好学園に着いた最初のころは生活習慣や文化の違いに戸惑い最後まで体調を壊さずに過ごせる気がしなかった。なぜなら、日本では普段あたりまえのように飲んでいる水やトイレ、風呂など普段の生活に欠かせないことのすべてが全く違っていてとても困難だった。しかし、日にちが経つにつれ、生活にも慣れていき、日本ではできない様々な体験をしていくうちに自分自身が成長していった気がした。

自分は普段から、人から何かを教わることのほうが多いので、実際に何かを教える立場に立ってみると何から手をつけていいかも分からずとても大変だった。しかし、先輩たちの授業を参考に、自分が授業をしたときにど

うすれば楽しんで授業を受けてくれるかを、夜のグループミーティングのときに考えていた。実際に授業をやってみて、日本語は語彙が豊富で難しい言葉なのに子供たちがとても熱心に取り組んでいるので、子供たちは何か新しいことを学ぶということがとても好きなのだなと思った。

カンボジアでは、少し昔にポルポト派による大量虐殺が起った。それは、ポルポト派の「新しい国を作る」、「いらぬ者を排除する」という考えから起きた。その犠牲者の数は、約200万人と言う人数にまでなった。その大半の人が、電気ショック、水攻め、指の爪を取る、逆さ吊り、などで拷問された。トゥールスレンにはその様子の写真が

あり、見てとても生々しかった。こんなことはもう二度とくり返してほしくないと心から思った。自分も心の中で気にいらぬ物は排除するというポルポト派に似た考えがあるかもしれない。ただそれは、その相手とはかかわらないなどの小さなことだ。しかしポルポト派は気に入らぬ者を全員拷問して殺すという確実にやりすぎたことをしている。しかも最近になってようやくポルポト派の裁判の判決が出たが死刑や終身刑などではなく、もしかしたら被告が生きている年齢で出所できると聞いてとても驚いた。

私はこのプログラムに参加することで日本ではできない体験ができました。異国の地に行っても言葉がなかなか通じなくても、相手との接し方も楽しみ方も変わらないと思いました。来年はこのプログラムに参加する人に現地の変化や感想を聞いて楽しみたいと思います。



## 価値観の違いを理解する

現代英語学科 1年 森山 覚



カンボジアでの体験は私にいくつかの変化をもたらした。例えば、もっと様々な国の文化を知りたいと思うようになったし、日本人として自分が、何ができるのかを考えるようになった。そして、私の中で一番変わったのは、人や物の見方である。言い換えれば、価値観の違いを理解することができたのである。

日本にいたときの私は、日本人はみなどこか、似たような価値観を持っていると思い込んでいて、理解できていなかった。しかし、カンボジアでの人々との触れ合いや、物価の違い、食文化の違い、教育環境の違いなど、様々な大きく異なる文化を感じ、体験することで、価値観の相違を理解することができた。

さらに言えば、価値観の相違とは、個人の見ている世界が異なるということに他ならないと思った。つまり、人の数だけ世界があり、同じ日本人で毎日会っている仲の良い友人でさえ、自分とは異なる世界で生きているのだ。そう考え始めると、今まで見慣れた自分の家や、通学路、学校、友人がどこか違って見えるから不思議である。改めて、いや、初めて世界は広いのだと認識することができた。そして、私の周りにも、まだまだ私の知らない世界が溢れているのだと気づくことが出来

た。これから他の世界を知ったときに、私の何が変わるのか、非常に楽しみである。

## 毎日が新鮮だった授業

現代英語学科 3年 柏 史織

私は、単純に夏休みに海外に行きたかった。東南アジアに行ったことがなかったので行ってみたいと思い、このプログラムに参加した。行くまではそれほどカンボジアや東南アジア自体には興味がなく、カンボジアの首都も公用語さえも知らなかった。ただ初めての場所に行くことにととてもわくわくしていた。

陸路でベトナムからカンボジアに入国し、とても印象的だったのはその雰囲気だった。入国審査の建物の中は、とても独特な雰囲気ですべてとも言えない緊張感が漂っていた。その雰囲気では少し不安になった。また、友好学園に行く途中でも孤児のような子供たちを見る機会がありとても心が痛かった。自分が今、この子供たちに何ができるのだろうか、いくら考えても答えが見つからず、葛藤することが多かった。

カンボジアの子供たちに英語を教えるのはとても楽しかった。日本にいる

今夏のカンボジアのプログラムは私の考えを大きく変え、その体験はずっと私の中に記憶として残り続けている。それだけの衝撃があり、自分自身の眼で見て、耳で聞いて、鼻で嗅いで、舌で味わって、肌で感じるという五感全てで体験することが、ただ情報として知っていることより、どれだけ重要なことかを知った。と同時に、人は衝撃を受けないと考え一つ変わらない生き物であると考えた。

カンボジアと聞いて何を思い浮かべるだろうか？ 水が飲めない？ 虫が多い？ 病気になりそう？ 私は初めマイナスのイメージしか持っていなかった。しかし、そんな私が、他国の文化をもっと知りたいと考えるようにさせた今夏のカンボジア。もし、自分の何かを変えたい、外国に行きたいと考えている人がいるならばこのプログラムに挑戦してほしい。

ときでさえ、実際に教室で授業をすることがなかったのもとても緊張した。しかしカンボジアの子どもたちは積極的に私たちに話しかけてくれて、とてもフレンドリーだったので、すぐに仲良くなることができた。そして授業もとてもよい雰囲気が進めることができた。積極的に手をあげて発表してくれる生徒が多く、とても意欲的だった。分からない部分があるとよく質問してくれてやりがいを感じた。

また同じ授業を何回もすることで問題点やよりよくするためにはどうしたらよいか、グループの人たちと話し合い、そのような活動もまた、とても勉強になった。実際に授業をしてみないとわからないことや、クラスによって進め方を変えたほうが良いことなどがあって、毎日が新鮮だった。来年、教育実習に行くので、この経験が役立てばいいと思う。

またその授業をスムーズに進めるた

めにカンボジアの大学生が手伝ってくれたのだが、彼らもまた勉強熱心で、彼らを見て自分の日本での生活を見直さなければならないとも思った。カンボジアの学生は英語も日本語も話すことができ、とてもびっくりした。カンボジアの学生たちからも得ることは多かった。

この旅を通して、カンボジアはまだまだ発展途上国で生活する上で不便だと思うことは多かったが、だからこそ生活が便利になっていくことに喜びを感じたり、日本では見ることでできないきれいな星空を見ることができたり、人の優しさを感じることができた。またカンボジアに行きたいと思った。



## サバイナ オットンモー

現代英語学科 3年 横田 玲子

私は、先生や友達の影響を受け、突然カンボジアに行くことを決意しました。もう締め切りはとっくに過ぎていましたが、なんとか参加させていただきました。家族にも「本当に行くの?」と心配される中、よくあんな短期間でこのプログラムに参加することを決められたなど、あのかの自分に驚かされます。どうしても今年カンボジアに行っておきたいと思い、頑張ろうと決意したものの、準備を進めていくにつれ、期待とともに不安な気持ちも募っていきました。

プノンペンからは大勢でワゴン車に乗込み、途中で車ごと船に乗ってメコン川を横断、約2時間半かかって友好学園に到着しました。それから荷物を置き一息ついていた時、直径約18センチの日本では見たこともないような毒性の巨大なクモが私たちの部屋に出現し、大騒ぎになりました。そのクモは心強いカンボジアの学生に退治してもらえましたが、その後の生活が一気に不安になりました。さらにトイレも水浴び場も衝撃的だったため、初日は既に日本が恋しくなっていました。

しかし授業が始まり、子どもたちのキラキラした笑顔を見たり、授業をサポートしてくれたカンボジアの大学生、村の人々と関わりながら生活をしていくうちに、そんな初日の思いが嘘みたいに毎日の生活が楽しくなっていきました。密かに苦痛に感じていた水浴びもいつの間にか気持ちよく感じ、人間の環境適応能力はすごいと思いました。

日本は炊事も洗濯もトイレも、あらゆるものが自動だったり、コンビニやスーパー、レストランが近くにあったり、夜道も明るい便利な国です。それに比べカンボジアは便利とはかけはなれています。でも、不便だから不幸というわけではありません。彼らは友達と思いっきり遊ぶ時間も家族とゆっくりご飯を食べる時間も、愛情に恵まれています。

また、自分のことだけでなく、家族や親戚、友人、隣人、村民、カンボジア全体の人のことを思い、支え合い、良くしていきたいと思っている人がたくさんいることに気が付きました。村を良くするため発展させるために大臣になりたいと強く願っている学生にも出会い、感激したと同時に今の自分が恥ずかしくなりました。子どもたちも学生も高い目標やビジョンを持って勉学に励んでいるところが日本とは大きく違って、カンボジアの素晴らしいところだと私は思います。

クメール語でサバイナオットンモー



という言葉は日本語では「ちょ～～楽しい！」という意味なのですが、のどかで美味しいものに溢れ、素直で可愛い子どもたちや素敵な人にたくさん出

会うことができたカンボジアでの生活は、まさにサバイナオットンモーでした。



## 私も必死になって教えた

文化交流学科 3年 大森 直浩

夏。この暑さが旅の合図。

去年このプログラムに初めて参加し、カンボジアの学生や子供たちと再会の約束をしてから一年がたった。思えば日本に帰ってきてから、カンボジアに行きたいと何回思っただろう。そんな思いから一年。私の待ち望んでいた季節がやってきた。

今回の旅は初参加者5名と私を含め6人で活動した。今年はカンボジアの首都、プノンペンにあるパラダイスホテルが私たちの集合場所となり、いくつかのグループがある中で私たちはタイを経由してカンボジアに入った。

ホテルに着き出迎えてくれたのは昨年、アシスタントをしてくれたメッカラーだった。一年前と変わらず元気な顔が見られてとてもうれしかった。彼は今年も学生の中のリーダーである。その日の夕食では、今年アシスタントをしてくれるカンボジアの学生が集まった。なかには去年アシスタントをしてくれた学生もいて、久しぶりの再開を喜び合った。

次の日は友好学園があるリング村に出発した。リング村は小さい村だが市場もあり活気に満ちあふれている。友好学園に着くと電気や水道が通っていることに気づいた。去年は、ロウソクの光を頼りに夕食やミーティングをしていたが、今年は、夜の暗さには困らなかった。水関係では、井戸を使い食器を洗ったり、水浴びをしたりしていたが、今年は蛇口をひねれば水が出る水道式になっていた。カンボジアの人々には便利でうれしいことだが、私にとってはなぜか寂しい気持ちになった。

こうして友好学園の生活は始まった。午前中は英語と日本語のグループに分かれて授業をした。私たちのグループ



は日本語で、自分の自己紹介ができることを最終目標に授業を進めていった。最初は不安でいっぱいだったが授業を始めるとその不安はなくなった。私が日本語を読み上げると子供たちはその何倍もの声で復唱してくれる。わからないところがあれば大きく手を上げて必死に質問をしてきてくれる。そんな子供たちの姿を見てとてもうれしくなり、私も必死になって教えた。今回の授業は子供たちに助けられた部分が多かったため成功とはいえないが、これを機会に日本に関心を持ってもらいたいと強く願う。また、教える立場であったが、私に多くを学ばせてくれた子供たちに感謝したい。

午後は昼寝をしたり、子供たちと遊んだり、町へ買い物に行ったりと各自、自由な時間を過ごした。その中でも子供たちと遊ぶ時間は私のかけがえのない思い出になった。去年も一緒に遊んだ子、初めて遊ぶ子、家に招待してくれた子。無邪気で元気な笑顔を見せてくれるその時間がわたしは何よりも好きだった。

そして最後の日、一人の学生が私にこう言った。「ダーネイとナオは友達。だからまた会いましょう。」その言葉が素直にうれしかった。私がカンボジアに行きたかった理由を再確認した瞬間でもあった。そして何人かの子供たちも「来年きてね。」と伝えてくれた。Dear カンボジアの友達、子供たちへ。また必ず会いましょう。

From なお





# みんな大きな夢を持っていた

現代英語学科 2年 重盛 真由子



私がこのプログラムに参加したいと思った理由は、今思えばただ、“カンボジアに行ってみよう” それだけだった。先輩達から聞いた話では水道も電気もない。もちろんお風呂もベッドもない。そして何より私は人前で授業をしたことがない。そんなところで私はやっていけるのかと思ったが、なぜかカンボジアに行くことに対して不安はあまりなかった。むしろそこで始まる新しい生活、初めての経験が、好奇心旺盛な私にとっては楽しみではなかった。

カンボジアへの直行便はないため、私達はベトナムからバスで国境を越えた。だんだん田舎になってゆく景色に、私の期待はますます膨らんできた。首都プノンペンに着き、町をトゥクトゥクというタクシーのような乗り物で走っていると、みんな笑顔で手を振ってくれる。もうこの時点で私はカンボジアが大好きになった。そこから私達が2週間生活する友好学園がある小さな村は、バスで2時間程のところにある。そのバスに乗っていると、老人から小さな子供までもが、窓を叩いて物を売ってきた。とても衝撃的で思わず目を反らしてしまった。それに道も舗装されていない場所が多く、バスはずっとガタガタと激しく揺れていた。これがカンボジアなんだ、と思った。

友好学園の生活は、朝5時に鶏の鳴き声と共に起床。まだ薄暗い外を懐中

電灯で照らしながら井戸まで行き、冷たい井戸水で顔を洗う。朝ご飯を食べている間にも生徒達が登校してくる。自転車で1時間もかけて来る子もいる。井戸で皿洗いをしたらあつという間に7時で授業開始。

初めての授業は本当に無我夢中だった。時間配分も上手くいかない。伝えたいことも上手く伝わらない。初めて私の心は不安だらけになった。しかし子供達の目はキラキラしていて、みんな積極的に手をあげてくれる。学びたいという意欲が伝わってくる。自分の不安な心や、もうできないと思ってしまった気持ちを悔やんだ。そしてこの可愛い生徒達にもっと教えたいと思えた。ある授業で、将来の夢を聞いた。みんなの答えは医者や先生だった。みんな大きな夢を持っていた。心からその夢を応援したいと思った。また、国旗や世界遺産を写真付きで教えたときだった。きっとみんな初めて見て聞く世界遺産に興味津々で、授業が終わってからも、“先生、これは何で読むの？”と熱心に聞いてはくメール語で読み仮名をふっていた。するとみんなが興味を示しどんどん生徒が集まってくる。教えることが本当に楽しいと思った。

午前中授業をしたら、午後は自由時間。井戸で洗濯をしたり、外の廊下でお昼寝をしたり、生徒の家に遊びに行ったり、遊びに来た子供達と遊んだり、マーケットまで歩いてコーヒーを飲ん

だり。カンボジアのコーヒーはすごく甘い。甘党の私は大好きな味だった。洗濯物がなびく外で男の子達が走り回り、廊下で小さい子供はお絵かき、女の子達と花で髪飾りを作ったり、歌を歌ったり、通訳さんとお互い言葉を教えあったり。私はあの時計なんて気にしない、ゆったりとした時間が一番好きだ。

暗くなり子供達が帰ったら夜ご飯。明日の授業の打ち合わせをし、水浴び。井戸水は冷たくて心臓が止まるかと思った。カンボジアの夜空はまるでプラネタリウムだ。地面に寝転がってたくさん流れ星を見た。外でキャンドルの明かりと共に語ったり、蚊には刺されるのが本当に楽しい時間だった。そして蚊帳の中の寝袋で寝る。虫が入ってきたこともあった。

道を歩いていると舗装工事をしてるところが少しだけあった。この村も発展しつつあるんだなあ、と思うと少し寂しい気持ちになった。でも発展しても人々の心は変わらないでいてほしいと思う。カンボジアでは、いつでも食べたい物を買って食べることもできないし、生活する上で必要なもの全てが日本とは違う。日本で当たり前だと思っていたこと全てが、とても凄いくことであって感謝すべきことだと思えた。日本は便利さの面では豊かかもしれないが、本当の意味での豊かとは何だろう。あのどこまでも続く草原、とても近くに感じる空や満天の星、地平線、そして子供達の笑顔を見ていると、今までの自分は何だったのだろうと考えた。

言葉でどう成長したとかは言い表せないけど、自分の中でたくさんのが変わったと思う。こう思えたのも2週間を共にしたみんなのおかげだ。この夏かけがえのないたくさんのもを得られたこのプログラムに関わった人全員に感謝したい。そして子供達が大人になってゆく未来に幸福を心から願う。

ある生徒に“来年も来るよね？”と言われた。きっと私はまたあの子供達の笑顔に会いに、あの場所へ行くだろう。



## 学校が楽しくて仕方がない

桜美林大学 リベラルアーツ学群 メディア専攻 3年 樋口 恵

私が今回のアジアンボランティアに参加した理由は、「友の会」\*でカンボジアの学生を経済支援している義兄の紹介で昔から知っていたこともあり、「いつか行こう……」が「さあ、行くぞ!」に変わったこと。そして、その国の言葉も、なにもわからない中でカンボジアの子供たちに言葉を教えるというカリキュラムにとっても惹かれたからである。

大学でジャーナリズムを学んでいる私は、子供や教育を題材にしたドキュメンタリーを作りたいと現在思っている。そのために、今回の体験を通して、「教える」ということがどのようなことなのか、カンボジアの子供たちはどのような生活をして、どのように学んでいるのか、ということを知り、これからは活かせられればと考えたことが参加の一番の理由であった。

他の国で生活をする、ということは自分の暮らしている国を外から見つめるということであるのだと、海外に行く度に私は痛感する。それは、今回のアジアンボランティアでもそうであったし、今まで行った国々よりもセンセーショナルに、驚くように痛烈に感じさせられた。

9月25日夜中、カンボジアの首都プノンペンに着いてすぐに人懐っこそ

うなトゥクトゥクのおじさんの笑顔につられるようにして、すぐに乗り込み、パラダイスホテルへと向かった。夜中ということもあり、町は静まりかえっていたが、街中を走り抜けるトゥクトゥクの中で、私の気持ちは日本ではない、という新鮮な感覚で満ち溢れていた。町へ出てはじめて感じたことは、町に漂うなんとも言えない臭いであった。ゴミなのか、排水なのか、わからないが日本では感じたことのない異臭。その時点で、町にゴミもなく異臭もしない日本との違いをすぐに感じさせられた。これからの生活、大丈夫だろうか……と思わせるカンボジアでの初めての印象だった。しかし、すぐにそんな印象は覆ることとなった。

「友好学園」での生活は今までにない驚きの連続。しかし、そんな驚きなど気にならないほどに友好学園での生活はとても楽しく、新鮮で、毎日が本当に早く過ぎていくことを感じた。肝心の授業は、なにかを教えるということが本当に難しく、自分の力不足を痛感する結果になり、反省の連続であった。

しかし、子供たちはそんな授業を一生懸命に聞いて、さらに必死の表情で次々と質問をしてくれる。笑顔で授業をすれば、笑顔で授業を受けてくれる。大きな声で繰り返してくれる。そんな

彼らの表情を見ていて、彼らにとって「学ぶ」ということが「楽しい」という感情とイコールになっているのだと感じて、日本での「学ぶ」意識との大きな違いを実感した。

日本では、学校に行きたくない子供や、子供同士のニュースになるほどの問題などが増えている。それほど日本における子供同士のコミュニケーションというものが複雑になってしまっている、ということではないだろうか。一方、友好学園の子供たちは、素直に「学校」というものが楽しくて仕方がないという表情で毎日席に座っている。私には、そんな彼らと接することで毎日たくさんのエネルギーをもらっていたように思う。

授業が終わると、毎日必ず子供たちは遊びにきてくれる。女の子は指輪をプレゼントしてくれたり、可愛いネイルをしてくれたり、髪を結ってくれたり、実に女の子らしい遊びを一緒に楽しんだ。さらに、大勢の女の子に、カンボジア伝統のアプサラダンスを、「違う、違う!そこはこう!」などとボディーランゲージで教わり、なぜか怒られながらも一緒に踊って楽しんだりもした。

一人の男の子が、私に向かって楽しそうに「ハンビアック、ハンビアック!」と言っては逃げてを繰り返していた。アシスタントのカンボジア人学生に「ハンビアックってなに?」と尋ねると、「なんでもないって意味だよ」と教えてくれた。彼は私が意味がわからないながらも反応していたことが面白かったのか、毎日「ハンビアック」を繰り返してした。今考えれば変なコミュニケーションであったが、十分に笑顔でお互いにコミュニケーションがとれていたように思う。カンボジアの子供たちは本当に人懐っこい。子供は本来、こんなに素直でかわいいものなのだろうか、今回の子供たちとの触れ合いを通して心が温かくなった。

買い物一つするだけでも新鮮なことばかりで、市場に行くとお店の人が日々の生活に重点を置いて商売をしていることが見てとれる。物価も本当に安い。日本では、会社第一、社員の生活より

も仕事に重点を置いているほうが大多数のように感じる。カンボジアの市場で働いている人たちをみると、生活が第一で、生活のために仕事をしている。そんな本来の「働く」という姿を目の当たりにしたことで、自分が働く、ということへの考え方も変わったように思う。

私は冒頭で、「他の国で生活をするということは、自分の暮らしている国を外から見つめること」と書いた。日本では一切生活に不便を感じることなく生活することができる。スイッチ一つで電気がつき、道路はどこも綺麗に舗装されつくして、町にはゴミがほつたらかされることもない。蛇口からはいつでも綺麗な水を出すことができる。そんな、生活には全く不便のない日本の素晴らしさを、カンボジアでは改めて感じた。

その一方で、日本に欠けているものも同時に感じた。それは、カンボジア

人のコミュニケーションの濃さである。子供たちは、全く見たこともない、初めての私たちに笑いかけてすぐに一緒に遊びに誘ってくれる。町の人たちは、気軽に「どこからきたの？」などと話しかけてくれる。日本ではそんな気軽なコミュニケーションをとることはなかなかできないように思う。知らない人に話しかけられても答えないように、その場の空気に合わせて、というのが今の日本の希薄なコミュニケーションの在り方のような気がする。日本に欠けているものが、カンボジアにはしっかりと根付いている。生活や文化、コミュニケーションに至って、今回の体験は日本を客観的に見るができる、本当に貴重な体験であった。

「毎年来るたびに、道路が舗装されていたり、電気が通っていたりや変化をしている」と先生は語っていた。もしかしたら、将来のカンボジアは現在の日本のような姿になっているかもし

れない。それほどに変化の速度が驚くほど速いカンボジアという国の将来に、友好学園で見た「学校大好き！」な子供たちの屈託のない笑顔がいつまでも残っていて欲しいと、そんなことを願ってやまない。そして、大きくなった子供たちにもう一度会える日を楽しみに、日本で精一杯頑張っていこうと思うのであった。

最後に、今回の参加を許可してくださった藤田先生、そしてパトリック。授業から生活の面までサポートしてくれたカンボジアのアシスタントの学生たち。そして、大学も違うほとんど面識のない私をやさしく受け入れてくれた茨城キリスト教大学のみなさんに感謝します。みんな、ありがとう！

\*カンボジア日本友好学園友の会：友好学園の卒業生に大学生活を送る学資を提供している。現在50名ほどの学生を支援。「1年5万円×4年間継続」が基本。

## Education for All, All for Education

児童教育学科 3年 直井 雄一郎

カンボジアの経済成長は僕の想像をはるかに超えていた。高層ビルが建ち始め、デパートがあり、ショーケースには携帯電話が並んでいる。電気は付くし、テレビも見られる。クラブやカジノだってある。どうやらこの国は、「豊か」になり始めたらしい。いや、「一部の人が豊か」になり始めたらしい。シェムリアップで出会ったカンボジア人にこの国の就学率を聞いてみた。小学校は殆どの子どもが卒業するらしい。しかし、中学校を卒業するのはその半分だという。この国の義務教育は日本と変わらない6・3制。つまり、子どもたちの半数が義務教育を修了していないことになる。理由を聞くと、「貧しいから。みんな家の手伝いや仕事をする。」と返ってきた。かつて、長く続いた内乱によって学ぶ機会を失った子どもたちは今、経済格差によって学ぶ機会を失っている。奪われている。

教育を受ける権利はRICHだけにあるのか。貧しい人々にはその権利はな



いのか。プログラム終了後、見学をしたプノンペンのスラムの壁に、「WHY IS EDUCATION IMPORTANT FOR THE RICH ?」といたずら書きされていたことが忘れられない。

カンボジアの中の教育格差。RICHな日本と貧しいカンボジアの教育格差。この格差を縮めることができるのは、その事実に気づいた人たち。僕はこの

夏、その事実に気づくことができた。そんな僕の次のステップは、実際に行動することだ。「EDUCATION FOR ALL, ALL FOR EDUCATION」の世界を目指して。

※日本国外務省（2010/03現在）によると、小学校の就学率約94%、中学校の就学率約34%。

# モイチュナムクラオイ

現代英語学科 1年 鈴木 香奈

地平線から昇る朝日、学校の目の前のコーヒー屋さん、校庭で遊ぶ子供たちの走る姿、雲ひとつない満天の星空、そして生徒たちの笑い声ととびきりの笑顔……日本に帰国して約1ヶ月、今年の夏の出来事が頭から離れない。

“このプログラムに参加したい”。入学してから数週間がたったころ、たまたま先生がこのプログラムについて話していたのを聞いたわたしの足は真っ先に説明会場へ向かった。カンボジアと聞いて思い浮かぶものはやはり“地雷”や“貧困”など暗いイメージのものばかりだったが、わたしが見た写真に写っていたものは“笑顔”だった。カンボジア行こうと決心した理由はこれだったのかもしれない。そして8月後半、新品の大きなバックパックを背中にわたしは日本を発った。

8月29日、首都プノンペンからワゴン車で約2時間のところにあるプレイベン州リング村という小さな村にある友好学園に到着した。カンボジアの人々はとても明るく親切で、わたしが手を振ればみんな笑顔で振り返してくれた。道を歩けばいろんな人が「こんにちは!」、「Hello!」と声をかけてきた。時には木の上や大きな水溜りの中からわたしを呼ぶ声が聞こえてすごく驚いたけれどうれしかった。

授業初日の明け方5時、わたしは先



輩と一緒に学校の塀の上に座って朝日を待った。地平線から昇る太陽はこれまでに見たどんな朝日よりも綺麗だった。午前7時、図書館はたくさんの子供たちで埋め尽くされた。初めてで少し緊張した子供たちの顔を今でもはっきりと覚えている。

授業は想像以上に苦戦した。日本語も英語もわからない子供たちに対して一生懸命ジェスチャーで教えたり、クメール語の本を見てクメール語で話してみたり。時にはカンボジア人の学生に通訳してもらったりもした。しかし子供たちはちゃんと理解してくれて熱心に一生懸命目を輝かせて勉強してくれた。1人が質問すればそれに連なって2人、3人と増えていってとても教え甲斐があった。歌を教えれば毎日「カナ! 聞いて!」と笑顔で歌ってくれてすごくうれしかった。

通訳として参加してくれたカンボジアの学生たちとの交流もあった。想像してたより日本語が上手でとてもびっくりした。一緒に話をする中でお互いの文化について知ることができた。またクメール語を教わったり、逆に日本

語を教えたりと、彼らとの交流はわたしにとってすごくプラスなことばかりだった。

午後からは市場に買い物にいたり、突然のスコールでジャンプしたり、通訳してくれるカンボジアの学生と話をしたり、バスケットコートに寝そべて満天の星空を見たり、近くのレストランでご飯を食べたり、子供たちにクメール語を教わったり。学園での生活は決して便利ではなかったけれど、日本では味わえないようなすばらしい経験ばかりだった。

授業最終日のお別れパーティー最中、生徒たちがノートの端っこに何か一生懸命に書いてちぎって渡してきた、中を開いてみるとそこには生徒たち自身の名前と私の名前が書いてあった。きつと“忘れないで”というサインだともう。そんな必死な生徒たちを見てわたしは思わず泣いてしまった。最後に「授業は楽しかった?」と聞くといっせいに「サバーイナッ!(とっても楽しい!)」と答えてくれたのは本当にうれしかった。

この二週間のプログラムを通して、わたしは彼らから“学ぶことの楽しさ”を教わった。もっともっと勉強してもっともっと彼らに教えてあげたい。彼らの笑顔を見るためにまた来年カンボジアに帰ってきたいと思う。

モイチュナムクラオイ!(また来年!)

## 変化する気持ち

現代英語学科 2年 広瀬 洋平

私は今年の夏、カンボジアの子供たちに日本語を教えるというとても貴重なボランティアに参加することができた。カンボジアでの半月間の生活は日本では体験できないようなことがたくさんあった。

カンボジアでの生活はほとんど学校で過ごしていた。最初の三日間は生活に慣れることができず、暇さえあれば日本に帰りたいと嘆いていた。この最初の三日間の夢は全て日本に帰りたい思いを強くさせた。

しかし私も次第にカンボジアでの生活に慣れ始め、朝五時の起床、井戸水でのお風呂、固い床での睡眠も苦にならなくなってきた。ここからようやく

ここでの生活が楽しくなってきた。

特に楽しかったことはやはり子供たちとの交流だった。授業中ではとても元気がよく、学習意欲もとても高かった。質問があれば言葉が通じなくても身振り手振りで何とか伝えようとしてくる……そんな一生懸命な子供たちを見ていると、授業中に(たまに)寝てしまう自分がとても恥ずかしく思えた。授業と授業の間の休憩時間も、子供たちは私たちの回りに集まっていつも一緒にじゃれ合っていた。

向こうの子供はいたずら好きが多く、みんなして脇腹をつつついたりつねってきたりちょっかいを出してくる。そんな十分間の短い休憩時間が私はとても楽しかった。

# 国籍や言語が違ってても

児童教育学科 3年 鈴木 洋人

その授業もお昼頃には終わってしまい、午後からはまったりとした自由時間。昼寝をしたり洗濯をしたり買い物に行ったり運動したり遊びに来る子供たちと遊んだり……各々好きに過ごしていた。私はたいてい子供たちと遊んでいた。

折り紙やだるまさんが転んだ色々な日本の遊びを教えたが、一番興味を示していたのはデジカメだった。撮った写真を見せるととても喜んでいて。そんな日々がとても楽しく幸せな気持ちになれた。

しかしあつという間に別れの日は来てしまった。最初のころは早く帰りたいと嘆いていたわたしだったが、その気持ちは全く変わっていた。もう少し、あと一日だけでも子供たちと一緒に居たい、心からそう思えた。いつもふざけていた子供もその日は涙を流していた。自分は泣かないと決めていたがそれを見た瞬間、がっつりもらい泣きしてしまった。

他国の言葉も文化も生活環境違う人たちとこれだけふれあうことができることはなかなかできることではないと思う。このプログラムのおかげで世界観が一気に変わった。発展途上国の現状や、今自分がどれだけ自堕落な生活を送っているかに気付かされた。

自分を見直したいと思っている人はぜひともカンボジアに行ってみてほしい。最近ではたまにカンボジアの夢を見てカンボジアにまた行きたいと嘆いている。



私が思っていた以上に世界は狭いのもかもしれない……国籍が違ってても言語が違ってても人と人はコミュニケーションがとれる。この夏私は日本から離れたカンボジアという国で多くのことを学ぶことができた。

ボランティアが始まる前はどのように子供たちに授業を教えられるのか、言葉が全く違うのにカンボジアの人たちとコミュニケーションを取ることができるのだろうか、楽しみや期待よりも不安ばかりが先行していた。

しかし、カンボジアに行ってみるとそんな不安はすぐになくなった。カンボジアの人たちはみんな親切で陽気な人たちばかりだった。街の中を歩けばみんな笑顔で挨拶してくるし、道を聞けば何人もの人が集まってきて道を教えてくれたり私の下手くそな英語でも一生懸命理解しようとしてくれたり、下手なクメール語で挨拶してもみんな笑顔で返してくれた。友好学園の子供たちも頑張って日本語で「こんにちは」などと話しかけてくれた。そんなカンボジアの人々の気持ちが私はすごく嬉しかった。日本では知らない人には挨拶などしないし、話しかけることもない。挨拶程度のこともかもしれないが日本では経験することはできないと思う。カンボジアの価値観に少し触れた気がした。

二週間のボランティア授業が始まると子供たちの元気の良さに圧倒された。

朝7時、まだ眠気が残りながら教室に入ると教室いっぱいの子供たちがいる。みんな授業が始まるのを楽しみにしているような笑顔で待っていた。私にとって子供たちの元気いっぱいの笑顔で言う「おはようございます」が目覚まし時計のようだった。子供たちに負けないようにこちらでも元気いっぱいで授業を行う。お昼までの授業だが子供たちの元気の良さにくたくたになってしまう。

子供達も帰り、午後になって昼寝をしていると、いつの間にか子供たちが集まってきていた。子供たちは全く休ませてくれなかった。しかし子供たちのキラキラした笑顔を見ているといつの間にか疲れなんて忘れて子供たちとはしゃいでいる自分がいた。こちらまで元気にさせてしまう子供たちの元気の良さには本当に驚かされた。朝から子供たちが帰る夕暮れ時まで友好学園には笑い声が尽きなかった。そんな元気いっぱいで一生懸命な子供たちだから、何か一つでも多くのことを教えてあげたいと思う気持ちで慣れない授業にも多くの工夫をこらし、少しでも子供たちに伝わるようにと頑張れたんだと思う。子供たちにとって少しでもためになる授業が行えていたら幸いです。

このボランティアをおこなう上で一番お世話になったのは通訳として参加してくれたカンボジアの大学生たちだった。授業面でも生活面でも彼らがいなければ成功することはなかったし、こんなにも楽しい2週間にはならなかっただろう。とても流暢な日本語で私たちに接してくれ、授業のことでアドバイスをしてくれたり、カンボジアの文化を教えてくれたり、彼らには教えてもらってばかりだったと思う。一緒にコーヒーを飲みに行ったり市場に買い物をしに行ったり、時にはくだらない話で馬鹿騒ぎしてみたり、そこには肌の色の違いとか国籍とか言語とか文化とかそんなことは関係なく、人と人のコミュニケーションがあったんだと思う。言葉が違ってても人と人はコミュニケーションが取れるし通じ合うことができることを私は彼らから学ぶこと

が出来た。日本にいたら当たり前のように感じることをカンボジアに来て改めて考え直すことができた。自分の伝えたいことが相手に伝わる喜び、相手の伝えたいことが自分に伝わる喜び、コミュニケーションが取れる喜び、そんなことを私は彼らに教えてもらった。日本にいたら得ることのできない多くの

ものをカンボジアで私は得ることができた。大げさかもしれないけど彼らには何度「ありがとう」と言っても足りないぐらい感謝している。そしてもう一度友好学園の子供たちと彼らに会いたい気持ちで今はいっぱいです。絶対にもう一度みんなに会いに行こう。

大学3年生の夏にカンボジアという

異国の地で経験したことは私のこれからの人生の中で大きな財産になるだろう。そして彼らと過ごした時間を一生忘れない。私にとって彼らとの思い出は宝物になったから。

カンボジアに行って本当によかった。

## ひ・と・つ・で・い・ち・ど・る！

文化交流学科 1年 小野瀬 美穂

最初は不安で仕方がなかったこのプロジェクト。現地集合現地解散でしかも海外に一月もの長い期間滞在したことのない私にとってこのプロジェクトに参加することは、とても勇気のいることでした。しかし、そんな不安もあつという間に消えてしまうほど、このプロジェクトはとても楽しく充実したものでした。

カンボジアで私は、友好学園の学生に日本語を教えました。言葉の通じない子供たちに日本語を教えることは難しく、なかなか上手くいきませんでした。言いたいことがよく伝わらなかったり、誤解をうんでしまうような説明をしてしまったりしました。しかし毎日のミーティングで授業の反省や改善点を話していく中で、どのようにしたら相手に伝わるのかを十分に理解していなければ授業は成り立たないということに気がつきました。また解りやすい説明をすること、はっきりと声を出すこと、など基本的なことを行いながらの授業は大変なものでした。が、そんな私たちの授業を毎日楽しみにしてくる子供たちの気持ちに応えるためにも頑張ろうと思えました。

最初は慣れないながらも日々の生活を学生と共に過ごし、授業をしていた私はカンボジアの多くの学生たちの勉強に取り組む姿勢にとても驚かされました。幼い子供から大学生までみんな真面目で、むしろ勉強が楽しい、もっと勉強がしたい！という気持ちで勉強をしている姿をたくさん目にしました。その先にある大きな夢や希望、目標のために努力をおしまない彼らの姿は、とても輝いて見えました。目標もなく、ただなんとなく大学生活を送ることは時間の無駄で、私も彼らの姿を見習わなければいけないと実感しました。

そのように私に教えてくれたカンボジアの子供達や大学生と交流をしたことは、とてもいい経験になり刺激にもなりました。

しかしカンボジアには勉強がしたくても、できない子供はたくさんいると聞きました。お金がなかったり勉強をする環境が整っていなかったり、そういった理由で自分の夢を諦めてしまう子供も少なくないと思います。例えば街中には多くの物売りの子供がいて、その子供たちは日本語を話していました。しかしよく聞くと、「ひとつでいちどる！」と同じ言葉を繰り返すばかりで他の日本語を話すことは出来ませんでした。きっと商売道具の一つの言葉、フレーズとして使うために覚えたのだと思います。夢を持つ以前に生きるために物売りをしている子供たちの姿を見たとき、学校に通って勉強できることや夢を持てることがどんなに幸せなことなのか分かりました。それを十分に理解しているカンボジアの学生だからこそ、あんなに真剣に勉強に取り組んでいるのだなと思います。

そんな彼らに少しでも私にできることはないのだろうか、何か力になりた



いと思った私はカンボジアの大学生のサポーターになることを決めました。それで一人の学生が四年間自分の好きな勉強ができるようになります。また私にとっては些細なサポートでも学生にとっては人生が大きく変わることです。そうして夢を追って頑張っている学生と私も一緒に大学四年間を過ごしていきたいと思っています。

カンボジアに行ったことが私の大学生活を充実したものにするためのきっかけになったのではないかと思います。またカンボジアでの生活がここまで楽しいものになったのは、大変な時もつらい時も助けてくれた先輩や友達が大勢いてくれたおかげだと思っています。

このプロジェクトにはまた参加したいなと思いました。

## 言葉はいらない、なんか不思議

幼児保育専攻 4年 野口 岳人

最初に、僕はカンボジアという国はあまりよく知りません。歴史、国の場所、衛生面、治安、生活、人々の様子、プログラムを終えた今でも、知らない事がたくさんあります。参加した動機も去年参加した後輩の話聞いて、カンボジアに興味を持ったというすごく単

純なものでした。授業案、行きたい場所もそこまで深く考えていなかったため、授業メンバー、一緒に行動したメンバーには迷惑をかけました。ごめんなさい。

最初にベトナムからバスで、カンボジアの首都プノンペンに向かいました。基本寝泊まりはホテルです。現地の学

生と一緒に行動していました。プノンペンには首都だけあって建物が多いです。だけど、貧富の差が多いので物乞いも多くいました。僕は屋台で食事することが多かったです。食事中、物乞いが必ず来ます。お金を恵んではいけないと言われたので、無視します。物乞いの人はずっと僕の隣に立っています。すごく心が痛くなりませんか？僕は耐えきれなくお金を恵んでしまいました。そしたらまた他の物乞いが来るではありませんか。そんなカンボジアの負の洗礼を受けた僕は、カンボジアの現状を知り、いかに自分が幸せだったか知りました。

次に学校での生活の話。首都プノンペンから車でメコン川を渡り、国道一号を通過して日本友好学園に向かいました。学園の周りには水田と民家だけで、何もありません。風呂は水浴び、電気は電灯のみ、トイレは自分で桶から水をすくって流さないといけないから、

大きいのをした後も、気が抜けないし、晩御飯の後のミーティングも、眠くて話聞けないし、毎日が大変でした。

授業は、現地の学生に通訳をお願いして、進めました。子ども達はとても積極的に授業を受けてくれたと思います。ただ僕の力不足で、理解しづらい授業だったと思います。ごめんなさい。授業は午前で終わり、午後からは自由時間なので、子ども達とひたすら遊びました。言葉は通じません。だけど、子ども達と接するのに、言葉は必要なかったです。なんか不思議です。体一つで子どもと仲良くなる感覚。日本ではまず味わえません。毎日があっという間、気づけばお別れ。みたいな感じでした。出発前、子ども達が見送りに来てくれて、うれしくて抱きしめちゃいました。学校での生活は本当にいい思い出です。

この文章を書いていくと、どんどんいろんな思い出が頭をよぎります。向



こうで仲良くなった現地に会いたいです。現地の御飯が食べたいです。一緒に行動したメンバーとまた旅行したいです。今回のプログラムは、自分の成長に繋がりました。企画してくれた藤田先生には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

## んじゃ、また来年!!

現代英語学科 2年 廣木 祐也

私がこのアジアボランティアに参加した理由は二つあります。まず、教員免許状の取得過程である私にとって、このボランティアは良い経験になるのではないかということ。そしてもう一つは、メディア媒体でしか得ることのできなかった、発展途上国であるカンボジアの現状を、自分の身体で確かめたかったからです。

プノンペンから友好学園へ移動する朝、二日酔いと車の異様な揺れで何度も戻しそうになったのをよく覚えています。ネックルーンと言う街を通ったとき、車が止まった瞬間にたくさんの子供達やお年寄りが駆け寄って来て、窓を何度も叩いて物乞いをしてきました。お金をあげたい……けどあげてはいけない……。私は自分と葛藤しながらとても胸が痛む思いをしました。都会を抜けひたすら田舎道を走り続けて2時間、友好学園に到着。冷房や冷蔵庫、機械なんてなにもない。

寝床は床に藁を敷いて蚊帳を張るだけ。お風呂はただの水浴び。トイレは桶で流すだけ。巨大なクモやサソリ、めちゃくちゃ小さいのに噛まれると痛いアリ。なんと言っても尋常じゃない

暑さ。毎日衝撃の連続でした。こんなんで2週間も入れるの？と、不安で仕方なかった初日。けれど日を追うごとに、日本じゃ味わえない人間味の溢れる生活は何故か苦にならなかったです。

友好学園での一日は、まだ暗い朝に起きて、管理人さんが作ってくれた朝食を食べ、授業の準備をし、50分の授業を4コマ、昼食を食べ、午後は夕食まで自由時間。各々、市場に買い出しに行ったり、子供達と遊んだり、時間を気にせずに自由に過ごすことができました。そして夕食を食べ、ミーティングをして、各々お風呂に行き、就寝。こんな生活をしていました。

授業については、私のグループは日本語を教えるグループで、トニーという通訳さんと一緒に子供たちに日本語を教えました。授業開始二日目の終わりに、生徒達がトニーにこう言ったそうです。「ねえ今何について勉強してたの？」と。

子供達が理解できてなかったわけではなく、私たちの教え方が問題だったのでした。伝えたいことがトニーにも子供達にも伝わらなくて、正直イライラしてしまうこともありました。けれ



どイライラしたことで何も解決法は見つからない。私たちは試行錯誤を重ね、できる限りのクメール語を覚え、ナチュラルに授業を進めることで、楽しいだけでなく「楽しい」の中にも難しさがある良い授業を考えることができました。その結果「じゃあこのゲームやりたい人～!」と言うと、ハイ!ハイ!と、順番待ちができなくてイスに乗ってまで手を高くあげてる子もいました。むしろ1コマ50分じゃ短すぎる!と思えるくらい子供達の意欲がはつきりと分かることができました。各クラスの最後の授業が終わる度に玲子さんは泣いていて、いつももらい泣きしそうでした。最後のクラスが終わりの時、子供達が私たちの身体に抱き着いて離れなかった時、本当に来て良かったなどボロボロに泣きながら思いました。普段絶対泣かないような子も号泣していて本当に最後なんだ……と帰りたくな

い気持ちでいっぱいでした。

カンボジアには私の大好きがたくさんあります。ひーたん！ひーたん！と呼んでくれるカンボジアの子供達、ひーたんの顔はふざけてる！と言う、通訳で来ていたカンボジア人の大学生達、素っ裸での水浴び、カフェダコ、先が見えない位広い空、歌を唄いながら寝転がって見た星空、アンコールビール、土砂降りの中でのシャンプー。ここに書ききれない位まだまだたくさんあります。

通訳として来ていたカンボジア人の大学生達は、みんな優しく、一人一人個性が溢れていました。私がネットワークのホテルで携帯を無くしてしまった時、彼らは私を精一杯元気づけてくれました。いつもは、私に変な顔をして笑わせる側なのに「ひたん見て！」と言って、笑わせてくれたりと、本当にあったかい人達だなと思いました。

帰国したあと、この夏私が体験したことを周りに話すと「行きたかったー」「来年行きたい！」とたくさんの方がカンボジアに興味を持ってくれました。行きたいと思ったら是非行ってみてください。本当に言葉じゃ説明できない感動が、たくさんあります。もっと伝えたいことがたくさんあるのに、どう伝えればいいのかわからなくてもどかしいです。バカンスにハワイやグアムなどに行くのもいいと思います。けれど私は確実にカンボジアをプッシュしたいと思います！この私の文章を読んで、一人でも来年の参加者が増えてくれたらいいなと思っています。

カンボジア大好き！ 最高の時間をありがとう。またみんなに会いに行きます。



## 便利な生活に慣れすぎている

現代英語学科 3年 金沢 真紀子

私がこのボランティアに参加しようと思ったきっかけは、教職を取っているの、「教える」ということに興味があったのと、ただ単にこのようなきっかけがないと、カンボジアに行くことも、知ることもないと思ったからです。しかし、行ってみたいとたくさんの方を吸収し、体験することができました。

まず、授業の面では、自分たちで授業内容を考えそれを教えるということがとても大変なことだと感じました。また、クラスによって雰囲気や、レベルがそれぞれ違うので、その時々何に重点に教えるか、時間配分をどうするかなど臨機応変にしなければならぬところがとても難しかったです。

しかし、カンボジアの子どもたちは常に向上心にあふれ、暑い中でも教室に電気がなくても、発音をさせれば大きな声で発音練習してくれたり、積極的に前にでて発表してくれたり、いつも真剣に授業に参加してくれました。

さらに私が驚いたことは、職業についての授業で、子どもたちに将来の夢についてきいてみると、医者や先生、農業、歌手などみんなそれぞれに将来の夢を持っていて、それに向かって勉強を一生懸命していたことでした。中には、自分の国のために、家族のためになどと目的を持っている子どももいて、とても立派だと思いました。

次に生活面においては、衝撃的な体験を含めてとても貴重な体験ができたと思います。懐中電灯を使っただけの生活や虫が多かったこと、昼過ぎまではとても暑くて晴天だったのに、いきなり空が暗くなり始めて、大雨が降ってきて、洗濯したての服を急いでとりこまなくてはいけなかったり、部屋に大きなクモが出てきて大慌てしたり。そしてなんとといっても、一番の衝撃はお風呂でした。シャワーもお湯も出ない。桶を使って体を流す。友好学園について1日目ですべての生活が思っていたよりも大変な気がしました。でも、3日も過ぎれば不思議とこの生活に慣れている自分がいたし、友達と小さなことでキャーキャー騒いでいたのも、今思うといい思い出になりました。

また、カンボジアでは、パンの間にコンデンスミルクをかけたり、コーヒーの中に大量に入れたり、コンデンスミルクが多く使われていてびっくりしました。

フードチャレンジで、人生で初めて虫を食べたり、ホピロンというアヒルの孵化する直前のものを食べられたり、すずめなど日本では食べられないものを食べられたり、カンボジアの食文化(?)に触れられたこともとても印象深い思い出です。

これらの経験を通して、私は日本という国にいて、便利な生活に慣れすぎていると実感しました。シャワーがなくても、近くにコンビニがなくても、テレビゲームがなくなっても、子どもたちは外で思いっきり、時には裸足で駆け回るし、電気がなくても、夜の廊下にロウソク並べてみんなで語れるし、なければ何か工夫して対応できるのが人間だし、どこか日本人は便利な生活の中で急ぐ生活になれて、心のゆとりが狭くなっているような気がしました。

また、道を歩けば豚や牛が普通にいる風景や、ただの晴れの日の景色でさえ日本とは違う美しさをもつ景色を見れた気がしました。発展したり生活用品が普及することはいいことだと思うし、現地の人たちにとってもいいことだと思います。しかし、きれいな景色だったり、人間らしさだったりがないでほしいと思いました。

2週間を通して、授業は満足のいくものではなかったし、子どもたちにとってもつまらなかつたりわかりにくかつたりしたときもあったと思います。でも一緒に勉強できて、途中辛いときもあったりしたけど、それを乗り越えられたのは、子どもたちの純粋な笑顔や元気なパワーをもらえたことや、一緒に生活できた友達や先生、通訳してくれたカンボジアの大学生がいたからだと思います。この2週間で、自分の価値観や物事に対する視点が大きく変わった気がしました。本当に貴重な経験ができたと思うし、参加してよかったです。そしてまた機会があれば、子どもたちに会いに行きたいと思いました。



# 行って感じるカンボジアの魅力

現代英語学科 3年 弓野 彩夏

今年の夏は、私にとって一生忘れることのできない、貴重な夏となった。きっかけは、とても単純なものだった。なんとなく興味を持って、日本語教員資格を取るために授業を受ける毎日。その中で、海外で日本語を教えることが私のやりたいことのひとつになった。このボランティアは、そんな私の夢を叶えてくれるとてもいい機会だったの



である。しかし、場所はカンボジア。それを聞いて最初に考えることは何だろうか。どうしてもマイナスなイメージが先立ってしまうのは私だけではなかっただろう。しかしこの後、現地で『本当のカンボジア』を知ることで、私の中でのイメージはガラリと変えられていったのだ。

授業開始初日。ちゃんと授業ができるか、みんなが楽しんでくれるか……そんな不安を抱えながら教室に入った。しかし、そんな心配はすぐにかき消されてしまった。とにかく子どもたち一人ひとりのやる気がすごいのだ。教壇に立ち、言葉を投げかける。全員が精一杯の声を出して返してくれる。「発表したい人〜？」問かけると、たくさん手が上がる。時間が足りなくて指しきれないほどだった。

休み時間になると、廊下がみんなの溜まり場になった。他のグループのメンバーと授業はどうだったか話したり、子どもたちと戯れたり……毎日のように私を見つけてはお菓子を口に入れてくれる子。花で作ったアクセサリや絵をくれる子。みんなカメラに興味津々で、写った自分の姿に大喜び。そんな

ことをしているうちに、あっという間に休み時間は終わってしまう。いつだって変わらない子どもたちの純粋な瞳、キラキラした笑顔、やる気に満ちあふれた元気。それが私の一番の原動力になった。

授業が終わると、午後はそれぞれ思い思いの時間を過ごす。洗濯をして干したと思ったら雨が……なんていつものこと。

学園から一歩外に出ると、そこにはローカルな村の暮らしが広がっている。見渡す限りの自然。そこらじゅうに牛や豚が放し飼いにされている。15分ほど歩いたところに、私たちがいつも水や果物を買うに行く小さな市場がある。そこに着くまでに会う、たくさんの人たち。子どもからお年寄りまでみんな笑顔で手を振ってくれる。市場の近くにある小さなお店。昼間から大人たちが集まってわいわいトランプをしているのだ。そこで飲む練乳いっぱいのコヒーがお気に入り何度か通った。日差しが強く、一番温度の高い時間帯。本当なら外に出ることすらためらうはずなのに、みんなの笑顔が見たくて、のびのびと暮らす動物に癒されたくて、気付けば外を歩いている。太陽の動きとともにのんびりと生活する村の人々を見ていると、時間の流れまでゆっくりと感じられた。

友好学園に来て最初の数日間はずっとの衝撃を受け、同時に逃げ出した

気持ちになった。お風呂は溜めてある水を手桶ですくって流すということや、どこにいても虫は避けられないことなど、キリがないくらい驚きの連続。使いたいときに水が出てこないこともあった。日本では当たり前でもカンボジアでは当たり前でできなかったとき、初めて日本の便利さに気付く。

そしてそんな生活に慣れたころ、日本にはないカンボジアの魅力に気付き始めたのだ。通訳としてサポートしてくれた現地の学生たちとはいろいろな話をした。その中で印象的だったことがある。彼らはみんなしっかりと夢を持っているということ。それは自分だけのためではなく、国を良くするための夢でもあるのだ。私のグループで、将来の夢を発表する授業があった。カンボジアでは、先生になることはとても難しく、なれるのはほんの一握りだと聞いた。それでもほとんどの子どもたちが先生になりたいと言う。「自分の国が好きだから、国を発展させるために働きたい。」私はこの言葉に感激した。その心の豊かさの背景には、家族との強い結びつきや小さい頃から助け合って生きてきた環境があることを感じた。

振り返ると短かった2週間。だけど、そこには日本では経験できないような新鮮で刺激的な日々が詰まっている。どれも行ってみないと分からないカンボジアの魅力。それを感じ、成長できたことを幸せに思う。現地の人々、そして一緒に共同生活をした日本人メンバー、出会ったすべての人に感謝したい。そして、また会えることを心から願っている。

## なぜ何度も同じ場所に行きたいのか

現代英語学科 2年 木村 紫絵里

“ただいま！！”

首都から移動するためのバンから降りた瞬間に出た言葉だった。変わらない、暑く照りつける日差しと、道路を走る牛たち、青く高い空が、今年も私を迎えてくれた。

人生二度目のカンボジア。

“また来年も来られる？”

去年の別れ際に仲の良かった生徒が言ってくれ、あまりのお別れの悲しさ

に、ふいに思わず“絶対来るよ！”と口をついて出てしまっていたのだ。

あれから一年。私は何が変わることが出来ていたのだろうか。去年、自分の生活を改めて見直させられ、変えていこうと決意したのは事実なのだが、実際にはそう上手くいかないものだった。帰国し、日本での慣れ親しんだ生活に戻ると、以前のわたしと変わらない毎日だったような気がする。

しかし、今年もう一度同じ場所を訪れて、毎日自ら授業を開き、皆で協力して二週間生活するというこの体験をし、また、生徒の相変わらずな瞳の輝きを目にしているうちに、再び気づかされ、再び決意させられた。

こうやって、繰り返し同じことでも、カンボジアは何度も私に気づかせてくれるのだろう。

新たなこともたくさんあった。

友好学園に到着した瞬間、“何も変わってない！”と嬉しくなった私だが、やはり何でも変わっていくものなのだろうか。“何も変わっていない”、決してそんなことはなかった。

去年毎日遊びに来ていた幼い子供たちが、今年あまり顔を見せなくなっていた。どうしたんだろうと心配していると、最近の水牛や豚の世話、家事、自分より幼いきょうだいの世話で忙しいらしい。去年は幼くてできなかったが、今年は少し成長したから、家の手伝いをするようになったのだろう。カンボジアでは子どもたちも重要な働き手なのだ。大きくなったという嬉しさもあったが、幼くして家族のために働くことの重さを考えさせられた。

また、去年は電気も水道もなく、すごい衝撃を受けたのだが、今年は驚くことに、電気も通り、大きなタンクが

作られ、水道の役目を果たしていた。そのため、あのお昼後の眠～い時間に、水浴びやトイレ用に井戸から水汲み、水運びをする必要がなかったし、蛇口をひねれば、タンクにためてある水が出てきた。

また、懐中電灯やろうそくが必要不可欠な生活だったのが、今年は色々な場所に電気が通っていたため、私のろうそくは使われずに終わってしまった。電気のおかげで、ミーティングでは自分が今何を書いているのかが、お風呂では、自分が洗っている所が、“すごい！よく見える(笑)!!”と、日本では絶対に経験できない感動を、いちいちしてしまった。

その他にも、学校の前の通りは舗装され、車が走りやすくなった(それでも道路の至る所に牛のフンがあるのが愛らしいが)、来学期からはパソコンの授業が始まると聞いた。

一年ぶりに行ったカンボジアは、着実に発展していた。私は関心した半面、どこか寂しかった。“前のままだった方が、カンボジアの良さがあった”、“これ以上あまり発展してほしくない”。そう思わずにはいられなかったが、それは私の、ないものねだりの様な、主観でしかない。どちらが良いかなんて存在しないと思うし、カンボジアの人々



は、もっと便利に住みやすく、そう思っているに違いないのだ。

複雑な心境だったがこれからどう“発展”していくのか、楽しみにしようと思う。

なぜ何度も同じ場所に行きたいのか、最近聞かれることが多い。私自身良くわからなかったが、きっと何度行っても新しい発見があり、そして忘れていたことを思い出させてくれるから、なのだと思う。

今年、また新たな課題も生まれた。だからきっと、また行ってしまうのだろう。そんな気がする。

もう一度皆に会える日を楽しみに、また頑張っていきたいと思う。





## Rain Dance

Patrick Stephens

The yard of the Cambodia Japan Friendship School was busy. Ten or so boys charged up one end of the cement slab and back down the other, tirelessly chucking the ball at rusty goals clinging to homemade backboards. The little children watched the boys, but not for long, as curiosity conquered attention spans and led them away to see other things. Just past the basketball court, another group of boys battled the heat on a dusty dirt court. Even with no shoes, the younger boy's jump propelled him high enough over the net to pound the ball past the large hands on the other side. Young girls were busy picking flowers to weave into fragrant bracelets and hair decorations for their friends from Japan. Others sat and talked or studied together under the gazebo to escape the sun's potent rays. Most of the IC students relaxed under the shade, their freshly washed laundry hung on homemade clotheslines in the yard.

Just as a motorcycle carrying two IC students and a Cambodian student returned from the daily trip to the market, another daily event began to take formation. It all happened quickly but inconspicuously. The tall white clouds that had stood at a distance

throughout the day began to assemble in the sky above us. The heavy air turned tepid then cool, and a breeze whispered of the coming cloudburst. A tiny cloud of dust rose from the ground as the first drop hit. Seemingly oblivious to it, the games continued at their same intensity. Another drop hit - then two more. The kids under the gazebo began to pack up their books as they got the message. Then, without notice the sky loosened its hold, and the deluge began.

With this, the boys awoke out of their competitive stupor. The courts cleared, and muddy feet hurried in all directions. Three to a motorcycle, a squadron of players zoomed out of the school grounds for home. A few IC students rushed to the clotheslines to retrieve everyone's clothes, leaving behind those that were hopelessly soaked. Everyone else darted for the nearest shelter.

The fun was just starting for some, though. A younger boy picked up

the abandoned basketball and began playing with it as the rain pounded the pavement around him. The puddles kept the ball from bouncing, but it didn't matter. Nothing mattered except enjoying the cool massage of the rain hitting his skin. Nothing mattered except the feeling as he stomped through the deep puddles. First one, then two girls from IC joined the boy in his rain dance on the court. The rain quickly saturated their hair and clothes as they began to play an aquatic form of basketball. Another student joined, and the game turned back into an unchoreographed dance. Arms outstretched, they ran in circles and skipped around their watery stage. Two more IC students saw a different opportunity in the chaos - bottle in hand, they lathered the sweet smelling soap into their hair, and let the heavens rinse it clean.

Every day the children of the area around the Cambodia Japan Friendship School are drawn to the grounds to study, talk and play together. The school is an island of opportunity and a window into the outside world. Through this window, these children sometimes get a glimpse of what is possible when hard work connects with opportunity. During the two weeks of our stay there, we became a part of the daily routine for these children. Like the rain that comes during the rainy season and leaves again, our time in Prey Veng was short. But like those raindrops, of which the nourishing effect of one is not noticed, the effect of millions is real and measurable. We'll be back again.



## アジアンボランティア 2010 会計報告 担当 勝山友里恵、鈴木香奈

単位は全て US\$

収入	学生企画奨励金		886.0
	参加者拠出金	\$200 × 25 人、\$10 × 23 人、+ \$10	5,240.0
	カンパ		37.825
	収入計		6,163.825



支出	会食	8/28	ソリアレストラン 40 人 \$344.5	728.3	
		9/11	ダラレスマイ鍋料理 38 人 \$245		
		9/12	プノンペン昼食 \$138		
	衣食住	8/28,9	LuckyMarket 買出し	355.8	
		8/29	ゴザ、蚊帳		40.0
		8/29	パン、水 (ネックルーン)		10.0
		8/30	(トリア市場)		18.875
		8/30	ガスボンベ		15.0
		8/31	水、果物 (トリア市場)		6.60
		9/1	パン (ネックルーン)		7.50
		9/1,2,3	水、果物		26.25
		9/4,5	果物、椰子砂糖他 (ネックルーン)		52.85
		9/6	水、果物、牛乳、トイレトペーパー他		14.0
		9/7-10	水、果物、麺、紙	31.425	
	交通	8/30	ガソリン、学生のバイク	1.0	419.375
		9/1	ガソリン、フェリー、駐輪代	2.375	
		9/3	チョルン家訪問交通費、パン+バイク	21.0	
		9/4	ネックルーン往復、モトロモ 2 台	40.0	
		9/11	PHN ⇄ 友好学園、パン 4 便	280.0	
		9/12	PHN 市内見学、TukTuk5 台	75.0	
	食費	9/3,10	朝夕食費→管理人 \$4 × 30 人 × 12 日	1440.0	
	アルバイト謝礼	9/2,10	\$3 × 日数、Makara 別途	391.0	
	ホテル	9/4	ネックルーン 1 室 \$15 × 15 室	225.0	
	寄付等	9/10	友好学園施設使用料、寄付	1,400.0	
		9/12	AzizaSchool 寄付	300.0	
		9/12	LightHouseOrphanage 寄付	300.0	
		9/17	DuanPrateepFoundation (Bangkok) 寄付	500.0	
	使途不明金			40.0	
	支出計			6,099.475	
	差し引き残高 (理論値)			64.35	



◆上記は基本的には 8 月 29 日から 9 月 11 日までのプログラム本体をカバーする計算。ただし最初と最後のプノンペンのホテル代は個別に支払った。
◆現金残高は \$31 + 139,900 リエル (= \$34,975) で、計 \$65,975 となる。残高 (理論値) \$64,350 との誤差は、ドルとリエルを併用していることから許容範囲内と考える。残額はアジアンボランティアの基金として残すこととした。
◆以上の拠出金のほかに、各参加者は航空運賃 (6 万～8 万円) などの交通費、カンボジアのビザ代金 (\$20)、プノンペン泊のホテル代 (1 泊 \$10～15 程度) などを支払った。アンコールワット観光を含めて、15 万円あれば充分であったようだ。\$1=85 円程度であることも幸いした。
◆アジアンバザール終了後、アジアンボランティア・サポート基金から補助金が支給される予定。

## アジアンボランティア 2010 参加者

文化交流学科 1 年/内田裕人、小野瀬美穂、勝山友里恵、砂押嵩人、望月勇希 3 年/大森直浩 4 年/鈴木麻由

現代英語学科 1 年/鈴木香奈、森山寛 2 年/木村紫絵里、重盛真由子、廣木祐也、広瀬洋平 3 年/柏史織、金沢真紀子、横田玲子、弓野彩夏 4 年/鴨志田純沙

児童教育学科 3 年/鈴木洋人、直井雄一郎 4 年/野口岳人

桜美林大学 リベラルアーツ学群 3 年/樋口恵

現代英語学科教員・Patrick Stephens、文化交流学科教員・藤田悟、アシスタント・藤田暁生